



# 共成



昭島市立共成小学校  
校長 佐伯 孝司  
令和元年12月3日

HP <http://www.city.akishima.ed.jp/~kyosei/>

## 日常から幸福を汲み上げる一年

校長 佐伯 孝司

「人間は、その不完全を許容しつつ、愛し合うことです。不完全であるが故に退け合うのではなく、人間同士が助け合うのです。善悪のいずれか一方に、その人を押し込めないことです。」——詩人 吉野弘さんが、詩人になることを決意した時につづたとされる文章の一節です。詩人 小池昌代さんが、吉野さんをこのように表現しています。「人間のありふれた日常から、詩を汲み上げ、作品を書きました。詩というのは贈り物なのだと思います。強く持ちます。」不完全な人間が助け合おうとする優しさやそれゆえの辛さを生活の中から汲み上げた言葉は、ありふれた日常を生きる人々からの贈り物である、と理解します。

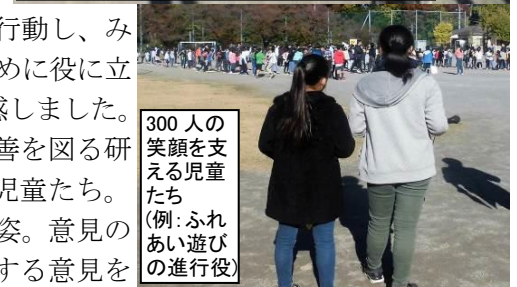
今年も、もうすぐ終わり。毎日の生活は、ありふれた日常だったかもしれません。しかし、不完全であるが故に伸びようとし、助け合おうとする子供たちの日常から、私たちはたくさんの贈り物を汲み上げたい。この一年の子供たちからの贈り物を振り返り、私たちの日常の幸せに感謝することも大切だと思います。

11月29日(金)、ふれあい月間の取組の一環として、代表委員会児童が中心となって実施した「全校ふれあい遊び」。教員も含めて約300人が笑顔になる楽しい時間を共有しました。300人の笑顔を支えてくれる児童。放送委員長は、放送室から楽しい音楽を流してくれました。



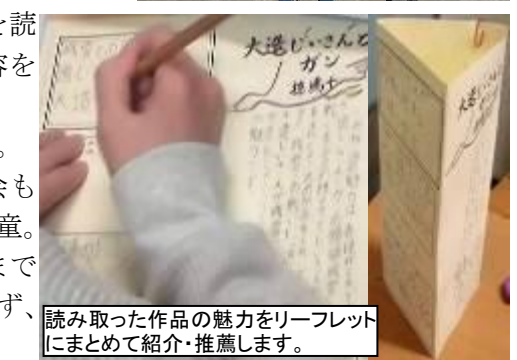
「ふれあい遊び」異学年の児童がふれあい、校庭いっぱいには300人の笑顔が広がりました。

「みんなと遊んでくれば」と声を掛ける教員に、自分の仕事だと言い、強い責任感を表します。進行役の2人の6年生。全体を見て、的確に指示を出しています。代表委員の児童たち。進行を支える仕事に協力して取り組んでいます。そして全校児童一人一人がその趣旨にそって行動し、みんなの優しさと笑顔が広がります。見返りを考えず、誰かが、誰かのために役に立とうとしている。日常の活動に、児童の心が生きていることを改めて実感しました。



300人の笑顔を支える児童たち(例:ふれあい遊びの進行役)

11月27日(水)、全教員が一つの授業を参観し学校としての授業改善を図る研究授業。文学教材を読み、自分の意見を書き、話し合っって考えを深める児童たち。自分の意見とその理由を、文章から見付けた根拠に基づいて話し合う姿。意見の出し合いがひと通り終わると「発表会になってしまう」と、意見に対する意見を述べ合い協議を深めていく。物語の最後の場面で、中心人物の心情を読み取るのに、最初の場面を想起して最後の場面に結び付け、その変容を話題にする児童。自分の経験と結び付けて意見を述べる児童。たった1時間の授業の積み重ねが大きな力になることを改めて実感しました。



読み取った作品の魅力をリーフレットにまとめて紹介・推薦します。

日常の学習との関連を図り、児童の主体性と協働性を育んだ学会も同じです。舞台袖に引っ込むやいなや力一杯のガッツポーズをとる児童。控室で、「一緒に台詞を言う前に『せいの』って言おう」とぎりぎりまでタイミングを合わせようとする児童。前日になっても演技に納得できず、先生や友達と特訓する児童など。

吉野弘さんの「虹の足」という詩を思い浮かべます。遠くからは美しく見える虹も、近くでは見えづらい。虹の中にいる人にはなおさら見えない。そんな虹を人の幸せと重ね合わせていると解釈することができます。

吉野弘「虹の足」より (一部抜粋)	
山路を登るバスの中で見たのだ、虹の足を。 乗客たちは頬を火照(ほて)らせ 野面に立った虹の足に見とれた。 多分、あれはバスの中の僕らには見えて 村の人々には見えないのだ。	そんなこともあるのだろう 他人には見えて 自分には見えない幸福の中で 格別驚きもせず 幸福に生きていることが――。

私たち教職員は、日常の児童の姿や言葉から、その価値を認め、汲み上げるよう、努めてきました。うまくいかない時にも前を向こう、相手の気持ちも考えようとする児童

に心を打たれてきました。その素晴らしい贈り物を受け取ることで、私たちの日常は幸せに満ちていきます。

今年一年、たくさんの幸せをくれた児童、支えていただいた保護者・地域の皆様、本校の教育活動にご理解とご協力をいただいた全ての皆様に心より感謝申し上げます。